

川幸夫動物文学全集
14

講談社



戸川幸夫動物文学全集14 けものの国へほか

昭和五十二年二月十八日 第一刷

昭和五十三年七月四日 第四刷

著者 戸川幸夫

装幀者 辻村益朗

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一十二二十一 郵便番号一二二

電話東京(〇三)九四五一一二二(大代表) 振替東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定価 一九〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

©戸川幸夫 一九七七年 Printed in Japan

目次

けものの国へ 5

山の動物たち 113

野獣撮影 171

動物珍話 225

解説・尾崎秀樹 326

けものの国へ

私の最初のアフリカ動物旅行

マンダニ先生

アフリカでの最初の夜明けを、私は機上で迎えた。前の日の夜中、ローマ空港を飛び立った東アフリカ航空のジェット旅客機は、夜のうちにリビア砂漠を越え、スーダンを横切りウガンダ国のエンテベ空港に向かっていた。高度一万メートル。

はるかに東の空が明るくなった。下界はまだ暗い。

やがて、真っ赤な、しかし少しもまぶしくない太陽が、地平線からぐうっと浮かび上がった。旅客機の窓ガラスを貫いた金線が、眠りの足りない旅客たちの顔を照らしはじめた。乗客は白人が半分に有色人種が半分であった。有色人種はアフリカ人にインド人、アラブ人。日本人は私と、それから私といっしょにナイロビで仕事することになっていたシナリオ・ライターの佐々木君の二人だけであった。

太陽はぐんぐんと昇って行き、下界はようやく明るくなってきた。

これがアフリカか——。私は窓ガラスに顔を寄せて見下ろした。広い、まったく広い。広大な大地が無限のひろがりを見せてどこまでも続き、その果ては煙のようにかすんで消えているが、山影はなかった。大地を黒々と色どっているのは大森林であるが、この高さからは藪苔類のように見える。この広い大地の表面を数多くの野獣たちがはい回っているのだろうか。

「ジャンボー（今日は）……アフリカ」

私はそっとつぶやいてみた。広大さは一時間も二時間も続いた。右も左もまったく同じだ。あまり広いので一万メートルという高度を感じさせない。これが日本なら、太平洋と日本海とが同時に見られるであろうが、山すら見えない。次第に、際涯がないのじやなからうかという気持ちになってきて、金斗雲に乗って阿弥陀如来の掌の中を懸命に飛び続けたという孫悟空の心細さがわかるような気がした。

この後、私は東アフリカのケニア、ウガンダ、タンザニア三国を動物を求めて一ヵ月の旅をしたのだが、その時、アフリカの広大さはいやというほどに味わわれた。私が雇った自動車は、時速一〇〇マイルから一四〇〜一五〇マイルで何時間も走り続けたが、孫悟空のように、私はアフリカの無限の広大さの外にとび出すことはできなかった。

日本に戻って来て、最初に私が受けた質問は、アフリカの印象は？ ということだった。

「一口に言って……」と私は答えた。

「無限ということでしょうね。無限の広大さ、無限の量、そして未だに知られないことが無限に残っている」といふこと。この三つでしょうね」

アフリカに行きたいというのは、私の子供のころからの夢であった。私が小学校の四年生の時だと思うが、アメリカの有名なマーチン・ジョンソン夫妻の撮影したアフリカ動物映画が新宿の武蔵野館で封切られたことがあった。私はさつそく見に行つて、その夜は興奮のあまり眠れなかった。そのころ、私はまだ東京市外といった西大久保に住んでいたのだが、二階の屋根に上つて星空を眺めては、いまごろアフリカの荒野ではキリンの群が走っているだろうなあ、ライオンが吼えているだろうなあと思像し、行きたさに身もだえしたものだ。こうした少年の日の夢は多くの場合、成長するにつれてだんだんとうすれて消えていくものだが、私の場合は逆に年とともに大きくふくらんでいった。中学生から高等学校生、そして新聞記者、作家と環境は変化していったが、私のアフリカへの憧れは少しも変わらなかった。

ぐずぐずしては夢は夢に終わつてしまふだろうと焦慮し、ほんとうにアフリカに行こうと決心したのは数年前だった。それから何度もアフリカに行く計画を立てたが、しかし、そのたびに億劫になつて実行しなかった。これが欧米旅行というのならチャンスはいくらもあったし、連

れもできる。実際に何度も誘われましたが、アフリカとなると行こうという人が少なかった。まして、野生動物をじっくりと見たいのだという者に、連れなんかのできるはずもなく、行くとすればたった一人で旅行することを覚悟しなければならなかった。外国語に自信のない私にはそれが億劫の原因だったが、とうとうたまらなくなつて、来年こそ断然、行こうと覚悟を決めたのが昭和四十一年の正月だった。そこで東アフリカの通用語であるスワヒリ語を勉強することにした。

と、うまいことに同好の士が現れた。漫画家の石川球太君で、彼は私の作品「牙王物語」を漫画化したことがあり、そんな関係から自分もぜひアフリカには行つてみたいと考えていたのだからいっしょに勉強しようと言った。スワヒリ語の先生さがしは彼がやってくれた。一ヵ月ほどして、彼はマンダニ君というタンザニアの留學生が、NHKでスワヒリ語の放送をしていることを聞きこんで、マンダニ君と話をつけてくれた。

マンダニ青年は、二十五、六歳であらうか。背が高く、端麗な面だちをしていた。アフリカ国籍だがインド系で、彼の両親と妹はタンザニア国のビクトリア湖畔にあるモアンザという所に住んでいるという話だった。彼の兄はナイロビでラジオ商をしており、彼の父も兄も姉も日本で勉強をしたという一家を挙げての大変な親日家であった。マンダニ青年は、週に三回、私の家に教えに来てくれることに

なり、私の書齋がスワヒリ語教室となった。

そう、私たちはかれこれ四ヵ月ほどスワヒリ語の勉強をしたであろうか。だから、「今日は」だとか「きょうなう」だとか、もう少し複雑な「私はこういう物が食べたい」といった程度の簡単な会話——ほんとに初歩のまた初歩のといった会話——しか終えていなかった。もつとも、私たちは、アフリカに行くのは次の年にしようと思っていたのだから、まだゆつくりした気分であつたわけだが、そこへ降つて湧いたように私に日本テレビから、アフリカへ行つてくれないかという誘いの話が起つた。

アフリカへ行つて、人間と動物を主題にしたテレビドラマを書いてほしいという話なのである。行きたい行きたいと思つていたアフリカに特派させるというのだから、飛び上がるほどうれしかったが、さて、よく考えてみると、語学の準備は未だしである。スワヒリ語はできないし、英語も簡単なことしかわからない。

外国には行きたいが、ベラベラの方がどうも苦手^{にがて}でね……と尻込みをする人がわが国には案外に多いが、私も確かにその中の一人であつた。パリだのローマだのニューヨークだのといった、日本人お馴染みの都市なら、あちらに住みついてゐる日本人も多いから、アルバイトに通訳として頼めもしよう。だがアフリカとなるとそうは参らぬ。

しかし、外国語がしゃべれないから外国旅行は見合わせだ、というのは愚の骨頂だ。まして、しゃべれるようにな

るまで延期するというのは、仁和寺^{にんねじ}の坊主式のやり方で、本末を顛倒^{てんとう}している。そこで私は、どんなに英語がベラベラとしゃべれても、フランスの片田舎やロシアの隅ではまずチンパンカンパンだろう。一人で何ヵ国語も自由自在に操れる人はいないのだから、英語国に行つたら、おれは中国語ならベラベラなんだぞ。ロシアに行けば、フランス語なら得意なんだがなあというつもりになつて、気を大きく持てばいい」と、強いて自分に思い込ませることにしていた。とにかくチャンスという怪物は額にしか毛が生えていないというから、前からひつつかむしかない。「私は目玉焼きが食べたい」くらいの貧弱な英会話力しかない私だが、とにかくアフリカに行くつもりでいた。

日本テレビとの打合せの時に、私は、当然通訳はつくんでしやうね……とたずねた。このことはスタッフの連中を当惑させたようであつた。なぜなれば、予算が切詰められているので、できるだけ出費を少なくしたい。そのためには通訳なんぞはとんでもないというわけである。スタッフの責任者牛山君は、私に、

「先生は英語が話せるんじゃないですか」

と渋い顔で言つた。残念ながら……と私は苦笑いした。

「そりやあまあ、あいさつ程度の簡単な会話なら何とかやつてのけられないこともないけれども、ドラマの原作の取材なんて、そんな複雑な会話はお手挙げだ。通訳がつかないなら、残念だが私は下りるしかない」

と言うと、彼はしばらく考え込んでいたが、「そんなら、シナリオ・ライターでペラペラのできるのをつけるようにしましょう」

と言ってくれた。ああそれなら助かる、では行きましよう、と、私は二つ返事で引受けた。

このとき、原作を書きにアフリカに派遣される人にもう一人、前の上野動物園長の林寿郎さんがあった。私が東アフリカへ、林さんがカメルーンへ行き、二人が同時に現地で原作を書いて、それを同行のシナリオ・ライターがシナリオ化するということになった。もともとこういう仕事は、原作者が現地をよく見て来て、帰ってから原作を書き、それをシナリオ・ライターがシナリオにするというのが本筋だが、こんどは非常に急いでいるので、とてもそんな悠長なことはしている余裕がない、だから原作者とシナリオ・ライターがいつしよに行つて、向こうでまとめてくれ。シナリオが出来上がるころに撮影隊を送りこむというのだった。林さんの場合は、前にアフリカに一年半以上も滞在していて、現地の事情はよくのみ込んでおり、また会話もなかなか上手だから通訳の心配はないが、私は恥ずかしながら、シナリオ・ライター頼りという心細さであった。

さて、いよいよ出発の一週間ほど前、初めてスタッフ全員の顔合わせがおこなわれた。シナリオ・ライターは売出しの佐々木守君だった。打合わせの後で、私は佐々木君に、

「頼みにしてますよ。僕はペラペラができないんで、あなたに取材してもらうからね」

と言うと、彼は愕然とした面持ちで私の顔をまじまじと眺め、それから、

「先生が通訳をしてくれるといわれたんで、私は安心していたんですよ」

と、私と同じことを言う。いろいろと話し合つてみると、私にはシナリオ・ライターがしゃべる、佐々木君には私がしゃべる、と、どうもそういうことに話がついていたらしい。これでは、めくらとめくらが手をつないでかけっこをするようなものである。そこで、私は牛山君にかけ合つた。しゃべれない者同士が二人でガン首をそろえて行つたつて、取材なんてとてもできない。いったいどうするつもりなんだ、と言うと、彼は、現地で通訳を捜してもらえませんか、とてもこちらから連れて行くほどの余裕はないんです、と言う。そこで、アフリカの方に問合せてみると、ヨーロッパと違つてナイロビあたりでは、日本語の通訳なんか一人もない。インボシブルだという返事である。出発直前になつてわれわれのアフリカ行きは、ハタと行詰まつてしまった。

スタッフの連中も、よく考えてみると、これは困つたということに気づいた。そこで私は、

「実は私にスワヒリ語を教えてくれているアフリカ人の先生がいる。英語とスワヒリ語は彼には国語だし、地理にも

通じている。日本語もかなりしゃべれる。マンガニという留学生だが、彼は夏休みに故郷に帰りがつてゐる。だから飛行機代と小づかいぐらいを出してやれば、彼は喜んで通訳の仕事を受けってくれるだろう」

と進言すると、そういう人がいるんなら、それくらいは何とか出そう、ということ、マンガニ先生が私たちと同行することになった。

私たちが羽田を出発したのはその年の八月十五日で雨が降っていた。日航機なので、乗客も日本人が多く外国に行くような気がしない。それでも香港、バンコク、ニューデリー、テヘランと進むにつれて、だんだんと外国のにおいが強くなってきた。面白いことに、どこの空港に着いても必ず日本語で話しかけてくる。土産品屋は片コトながら日本語で通じる。そこで、私と佐々木君は、これなら大したことはないなあ、幸先よしと笑い合ったが、これが大間違ひ。

カイロに着いた。それまで私たちはいたる所でミスター・ヤマモトと呼びかけられた。どうも山本さんという日本人がいちばん多く買物をするらしい。カイロでも、ミスター・山本、アレキサンドリアを買えとしきりに勧められた。日本人ぐらゐ買物の好きな人種はないようだ。飛行機の乗継ぎの都合で、本来ならばカイロからナイロビに行くのが近いのだが、ローマまで行き、夜行便でナイロビに向かった。最初に述べたアフリカでの夜明けは、この後の飛

行機の中のことなのである。

TOKYO がない

地上も、ほのぼのと明るくなりかけたころ、われわれの飛行機はウガンダ国のエンテベ空港に着陸した。さして広くもなく立派でもない空港だが、ヨーロッパから東アフリカへはいる時の寄港地として国際空港になっている。

エンテベという町は、ビクトリア湖畔の東北岸にある美しい町だ。この空港で、飛行機が給油している間われわれは朝食をとった。食堂ガールが丸い頭のアフリカ人であることも私にはもの珍しく感じられた。夜行便であまりよく眠れなかったので、濃いコーヒーを飲んだあと、空港のロビーに出てみた。すると、その軒先に標柱が立っていて、矢印の板が一面につけられている。板には、ニューヨーク何千キロ、ロンドン何千キロ、ローマはこの方向に何千キロというふうに書込まれている。はあ、ロンドンはこっちに当たるのか、ローマは、おお、ここからあれだけ離れているのか、と、乗客が一見してわかるようになっていたのだ。

私もしばらく眺めていた。ニューヨーク、ワシントン、ロンドン、ベルリン、パリ、ローマ……等々、欧米の大都市はエンテベからの距離の關係もあつて標識があるのは当然であつた。さて、東洋の方はどうなっているかなと回り

込んでみると、ニューデリー、バンコク、香港、上海、シンガポール、ジャカルタ、マニラとあるが、東京がない。東京がないくらいだから、日本のその他の都市名はもちろんない。私は、きつとT O K Y Oと書いた札が脱落したのだらうと思った。ちょうど、アフリカ人の空港職員が通りかかったので、呼びとめて、東京は？ と聞いてみた。すると彼は首を振って、初めから東京はないのだと答えた。

「WHY？」

と私は問い返した。彼は困ったという顔をして、わからないと答えた。しかし、それはわからないのではなくて、ほんとうはその必要がないという返事だったのだ。なぜなら、日本は東アフリカと過去にそれほど深い関係を持っていなかったからである。

ナイロビ空港に滑り込んだのは、朝の八時五十分であった。日本を出発してから暦の上では二日目である。

入国の手続きをして、いよいよ税関の検査となった。私と佐々木君は分けられた。こういうとはなはだ失礼な言い分に当たるが、私の方が佐々木君よりは、いささか毛が生えた程度にはしゃべれた。そこで、彼の方へマンダニ先生がついた。

黒光りのしたたくましいアフリカ人の税関吏は、私の手荷物を見ながらいろいろと話しかけてきた。もちろん、私にはよくわからないし、あまりしゃべったこともなかったもので、わかっていても十分に答えられない。とにかく彼が、ピ

ストルを持っていかとか、宝石を持っているかたずねているのはわかったので、「NO」の一点張りで通した。これには彼も弱つたらしい。苦笑しながら、「OK、OK」と、手を振って、早く通れと言った。

さて、佐々木君たちは……？ と出口でしばらく待っていたが、なかなか出てこない。さあ、気になった。のぞいてみると、何やら取調べが嚴重のようである。三十分以上もかかってやっと二人が出てきた。どうしたんだね、と聞く。

「私が五千元、マンダニ君が三千元の税金をとられたんですよ」

と言う。どういうわけだ、と私は尋ねた。税関吏が、何かプレゼントする物は持っていないかと聞いたので、マンダニ君が、実はこのゲーム・ワードン（野獣保護官）にプレゼントするトランジスタ・ラジオを持ってきた。テレビの撮影のためにカメラも数台持参したと詳しく説明したので、プレゼントするならばと税金がかけられたというわけである。つまり、逆説的な言い方をすれば、ペラペラと英語がしゃべれたために、税金がかけられたということになる。それを聞いて言葉のできないことにも得はあるもんだナと、私はクスクス笑いをした。

空港には日本大使館の山本事務官、伊藤忠商事の有地敬造支社長と、山本優駐在員の三人が迎えに来てくれた。

私たちがナイロビ空港に着いた時、われわれの搭乗機よ

りもはるかに巨大で立派な、ソビエトのジェット旅客機が到着していた。ソ連がアフリカ空路を開いたという話は聞いていなかったもので、有地さんに尋ねてみると、

「あれは留学生を連れに来てるんですよ。毎年来ます」という返事。

ソ連は毎年、東アフリカの青年男女を五、六十人、モスクワに連れて行って留学させている。送り迎えも自国の飛行機を使っている。留学費もおそらくソ連持ちなのでしょう。ですから、ソ連流に教育されたアフリカ人が、年々東アフリカにはふえていっているのです。これを見て、アメリカもイギリスも黙ってはいられないとして、同じことをやりはじめた。最近では中国もこれに加わっているという話だった。

技術提携や資本投下など、中国のタンザニアをはじめ東アフリカへの進出はめざましいものがあります、と山本さんも話してくれた。

ナイロビのホテルへ向かう車の中で、私はマンダニ君に、

「東京に留学しているアフリカの学生はいったい何人くらいいらるだろうね？」

と尋ねてみた。彼は小首をひねって、

「私の知ってる限りでは、東京には私とカメルーンから来てるのがもう一人います。ケニアからも一人来てるはずですがね……」

と言った。六十人对三人。ずいぶん差がある。

その後、私は東アフリカ各地を四十日にわたって旅行したが、私を日本人だと見破った者はなかった。

私が、日本人かと質問されたのは、旅行の終わりにカイロへ出て、カイロのヒルトン・ホテルに投宿した時だった。カイロには日本人が多いからである。

東アフリカに関する限り、日本の影ははなはだ薄いと感じた。一回目のアフリカ旅行では、ウガンダ、ケニア、タンザニアの三国しか回らなかったから、それだけですべてを律することはできないにしても、少なくとも、東アフリカを代表するこの三国から受けた印象は、ひどく日本は立遅れているという感じだった。少なくとも中国に遅れないだけの政策はとれないものなのか、と痛感をしたものである。

野獣は保護されていた

アフリカといえば、象だの犀だのがどこでもウロウロしているところと一般には考えられがちだが、そんなことはない。

もちろん、野獣は多いが、それは、動物たちが保護を加えられている地域においてであって、狩猟が許可されている地方では、一頭の象を見つけるために数人の偵察員を放って、何日も、時には何十日も搜索しなければならぬ。ナイロビで有名な動物商のカ・ハートレー氏に会った

が、その時、彼の息子さんたちは象を捕えにサハリ（旅行）に出ていると言っていた。もう少し早くわかっていたら連れて行ってもらうのだったと答えると、この次のチャンスをねらいなさい、四十日くらいの余裕をもっていられしやいと話してくれた。そのくらい、野獸を見つけるのは困難なのである。

だが、アフリカで野獸を観察するだけなら、野獸を保護している地域に行くのが手っ取り早い。保護地域といったところで、別に人間の手が加えられているわけではない。太古のままの大自然を動物のために残してあって、狩猟を禁止し密猟者を監視している、ただそれだけのことなのだ。

アフリカの動物保護地域は二つに大別されている。一つはナショナル・パーク（国立公園）で、もう一つはゲーム・リザーブ（動物保護地区）である。この両地区はだいたい同じようなものだけれども、ゲーム・リザーブというのは、その地区内の動物が、特に何かいざこざを起こさない限り、動物を殺してはならないと定められている場所であって、その中にアフリカ人が居住したり、また、許可を得た白人が農園や牧場を持つこともある。またその地区も国家が持っているというのではなくして、個人あるいは一族、たとえば、アンボセリ・ゲーム・リザーブのように、マサイの大酋長がその地域を支配し、経営をしているということもある。ナショナル・パークというのは国営または半国営でこの地区内での一般人の居住は許されてな

い。住んでいるのは公園内の動物の福祉をつかさどる管理人と特別な住民だけである。旅行者はこういった地域を訪れるときは自動車に乗らなければならない規則になっていて、宿泊は許可されている。しかし、それも、どこでも勝手に泊まるというわけではなく、定められた場所にあるロッジやキャンプに泊まることを命じられる。ナショナル・パークは後になってできたもので、その以前にゲーム・リザーブはあった。いわばゲーム・リザーブが発達してゆけばナショナル・パークの形態を整えていく、ということもいいかもしれない。

東アフリカはアフリカでも、もっとも野獸が多い地域だが、ケニア、ウガンダ、タンザニアの国々は、国内にこういった動物保護地域をいくつも持つていて、動物たちが減少したり絶滅したりしないように、常に注意をはらっている。アフリカ人たちに、動物を大切にするようにと最初に教え込んだのは英国人であった。英国は世界でもっとも動物愛護精神が徹底しているお国柄からであらう。だから、東アフリカが英国の支配から離れて独立した時、世界の動物愛護者たちは、アフリカの野獸はどうなるだろうと心配したものだ。

イタリア映画の「さらばアフリカ」はこの点を衝いたもので、日本でも大評判になったが、世界で大きな反響を呼んだそうだ。この映画を見る限りでは、アフリカが独立して以来、動物たちはバタバタと殺されているという強い印

象を与えた。私もアフリカに渡るまでは、そのことについて不安だったが、来て見て、これはまったくの作り物だということがわかった。東アフリカの三国政府は、この映画は、ある意図のもとに作られた虚偽の作品だとして激昂し、上映を禁止した。このお蔭で、その後東アフリカを訪ねる撮影隊は、嚴重な取締まりにあっているが、私たちも、撮影意図が何であるか、どのような筋立て映画を作るのかと、いろいろとやかましく調べられた。

ところでアフリカの野獣は、ほんとうはどうなっているだろうか。このことは私がアフリカを訪ねるに当たっているちばん気にしていたところであったが、結論からいうならば、英国植民地時代と同じに、いやそれ以上に、今日では大事に保護されている。私は安心した。

ここで、東アフリカの動物保護政策について説明しておく必要がある。

日本へ帰ってから、私は数人の人から、

「何を撃ちました？」

という質問を受けた。もつとも愚劣な質問は、

「河馬の肉はうまいですか？」

「象を食べましたか？」

というのだ。アフリカに行けば猛獣がうようよしていて、それをボンボンと鉄砲で撃って、料理して食べているような錯覚を持っている人が、まだ日本にはたくさんいるのにはびっくりしたものである。アフリカ旅行中に、私は

町でアフリカ人からよく話しかけられた。

「お前はチャイニースか？」

日本人があまり訪れなかった土地だから、これはやむをえない。そこで私は、ノー、ジャパニースだ、と答える。すると、

「そうか、日本か」

と言う。そこで、こちらにも興味を起こして、

「日本について知ってるか？」

と尋ねると、知ってるとも、とうなずく。どんなことだときくと、日本はトランジスタ・ラジオを作る国だ、カメラのすぐれた国だ、と答える。もつともである。そこで、もう一歩踏み込んで、

「じゃ、日本の首府は何という所か知ってるか、言ってみな」

と言うと、彼らはちよつと考えて、

「日本の首府は……エーと……モスクワだろう」

などと答える。

「モスクワはソビエトじゃないか。この前オリンピックをやった東京を知らないのか？」

と言っていると、

「オー、東京は日本か？」

ざっとこんな具合だった。

あるキャンプで、バーに行くと、そのバーテンが、私にこういう質問をした。

「ジャバニーズとチャイニーズは同じ人種か？」
というのだ。

アフリカ大衆の日本に関する一般的知識はきわめて低い。カメラやトランジスタではメイド・イン・ジャパンをいやというほど知っているが、日本そのものについてはほとんど知らないのである。その認識のなさに苦笑させられたものだが、日本でもアフリカについては同様の認識が多いから、地球の裏側という距離だけではなく、いままでに付合ひのなかったというところで、やむをえないことかもしれない。私がアフリカに行くと言ったら、この暑いのに大変ですね、と言った人がたくさんいた。日本の夏は、赤道を越えた東アフリカでは冬なのである。しかも、東アフリカは高原地帯だから、東京の十月ごろのようにさわやかな涼しい気候で、ナイロビは世界一の健康地とさえいわれているのに……。

アフリカ人たちは、自分の国に棲む動物が観光資源として重要な役目を果たしていることを知っているから、その保護には大いに力を入れている。東アフリカで、野獣の皮や角や牙で作った土産物を買うと、ゲーム・ワードンの「これは密猟したものではない」という証明書をつけてくれる。これがないと持歩くことも、お土産品として持帰ることも禁止され、処罰される。そこまで保護を徹底させている。ゲーム・ワードンは日本では狩猟監視官などと訳されているが、これはどうも当たっていないように私には思

える。ゲームというのは、日本では競技を指すが、アフリカではそれから転化したのだろうか、ゲームの相手となる野獣、つまり狩猟の対象となるような野獣を主に指しているようである。つまり、ゲーム・ワードンというのは、そういう野獣の保護と管理に当たるお役人なのであって、野獣保護官とでも訳した方が内容的にはぴったりする。日本でいうと動物園長がいちばん近いのかもしれない。しかし、日本でいうところの動物園長や単なる見張りの役人ではない。

国立公園といっても、小さい所でも——たとえばナイロビの国立公園などはもっとも小さいものの一つであるが——かなりの広大な面積を占めている。大きい所になると、日本の長野県や秋田県以上の広さを持っている。つまり、その広漠とした保護地区の中に鉄道が走り、駅があり、町があり、市場が立っているわけで、その広大な地域の中に棲む動物の温存、保護、繁殖などから、動物のための土木建築や密猟者の取締まり、警察権、そういうたすべのののに関する大きな権限を持っているのだから、動物園長というよりも、日本でいうならば県知事とでもいった方が近いかもしれない。

私はナイロビに着いて、ナイロビ・ナショナル・パークのチーフ・ゲーム・ワードンのデニス・カーニー氏に会った。デニス・カーニー氏は、アイルランド系のアフリカンで、ナイロビに生まれ、動物が好きなどところからこの道に